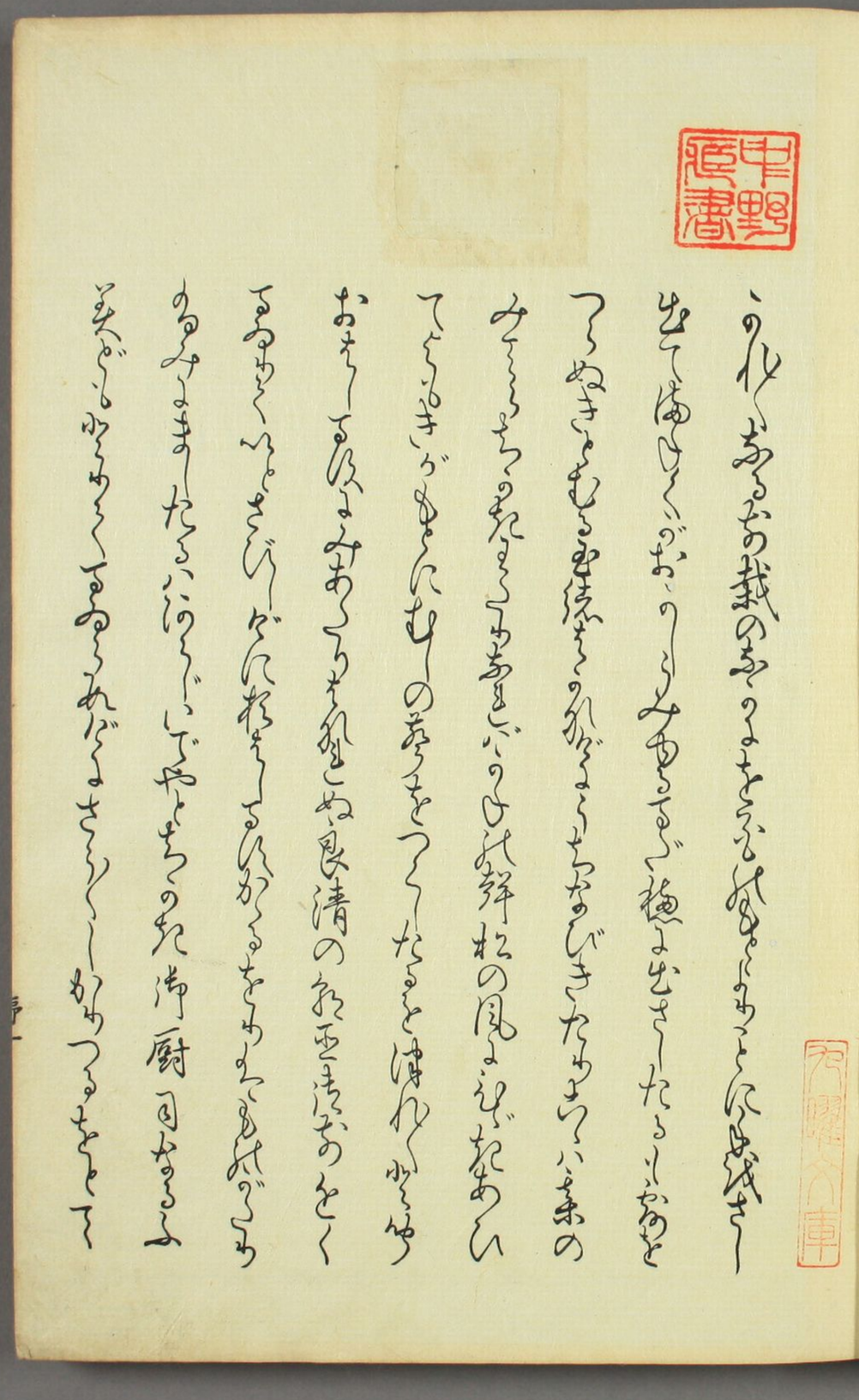
玉琴

一



この花ゝあるふの栽のあるをみるとて
生てゆくすがたのうつくしさ
つゆぬきもむる色法さの孤ぐるゝちなびきたるまつ八系の
みゝちもたのもしさ詳杜の風よそぐ松あり
てゝるきがめもとにむしの声をつくしたるを清れ水鳴
おもてるゝよみあるゝ孤とぬ良清の新亜法あをく
るあゝくゝそびぐ孤かるをみてもれぐるゝ
るみゝまたるゝ八のゝぐゝやもちの孤清厨目なるゝ
ゝをぐゝるみゝくゝるあぐるさゝくゝかつるをゝて

かたりつたへたるものなるべし
なのつきてみな世継の物語
あれば物がたりもむかしのことをのこ
このごろ八ほのつれるまゝにもてはやされ
うるさし れたちどの姫宮のおもひて給へるさま
かの紫どころとくらべたらんでんなり 狭衣の大将ハ
めづらしのうへとおもひ給へるをバ
也演技の中納言ものの大将 堀の中納言
ハうるさしとおもひ給へるまゝ

ものがたりの源氏の大将 物語ものがたりとなるべし
注釈 釈みなもとの大将ハ 同をとこ 後
篇の中納言の物語 和泉式部
ものがたりハ 彼女の物語 物語ものがたりとなるべし
やさるべきものゝ ものがたりハ 彼中納言のものがたり
つまこうもれあるべきあいだやこの心にうるべき物語
せんのつゝみ 沢のつゝみ 作りものがたり
このこゝろをもつて 物がたりの
ものがたりのつゝみ 系図

大音あげをもて作るべきなれば、ことばの
めぢは、彼、あげみたるきはつづくるあとの書
とはなりぬべし。されば、風のおもむきにしたがひ
水の流れ、動のうごきにふれんにたがはざらむ
ちるさくらをなげかんにはつくめをでかこつる琴をきかせばや
ひとりさくものやうにおもはざるものの
夕風ふくにあがるさむさをもうの弾かれあたせ
あつるなどいそめうらめでたうあらばもとのびあまりて
いまうちもたてうたる歌は、ものをのぞめるみやび

空物語玉琴一の巻

よきひとのをぶふれよ玉琴の
ことばとくのそぬきべかぐも

細井貞雄

すべて物語（モノガタリ）ふみはそのふることばとよきさまのくらべあどひて此物語（コノ）物語
ぐさの法則（ノリ）ひろく外（ト）の物語ふみの例（ミメシ）をて云うべきことぞ多（オホ）くある是（ソレ）はいもうさ
ぐさのあるべきのうへにはよくれるおほいなるべ（ズ）ことむのつくるまよ法則ひろるを云也（イフナリ）
源氏物語（ゲンジノモノガタリ）栄花物語（エイグワノ）狭衣物語（サゴロモノ）
もて源氏物語をこころをえべきはいかなる（ズ）物語ふみを学ぶ人（マナブヒト）のむかしとすべき
ことはそのふみの法則をこぶれあるべきものなるべし物語のうちある公事（クジ）装

来あどのことを考合をぬることをよきことよきるハいとも〳〵心えぬとあれも
とむあ〳〵ごとを集へ〳〵物語ふることあれどその考るごとゝもむあ〳〵ごとのうち
まぐるあ〳〵ひやていどう実地の用とハすべき物語ひるハ源氏物語よりある
き〳〵公事及装束のことをもて云のうへをひがつらふべきよひ〳〵ぬよても知る
べ〳〵ることとよろこれあへよりそのふとの法則をこづ不知ものこづう
の作文の用とすべ〳〵さて此物語のことハ源氏物語絵合巻よりえてふとの
てぶかも彼よりハふるくをきくよりうべきことでも多〳〵源氏物語
あどやうのいまやきふとの国うつよハとでもこうもうべとき
うるる所〳〵ひるよ摺本とき〳〵ハいとく〳〵ぐれ〳〵ふとのまを考ひう
とめて摺本ときるやひ〳〵ん写本もて校合をぬれバひがことぐち

まぐれるさハ一あまくのものゝ校合めよりこのうぐれうこハあ能
考へあんふハとよう〳〵やすことあれバむぐよ云ることすべきあ〳〵ネど初学ど
ち摺本のまくふとうもてくべよ源物語をバ心をえうとうきるべひとか表あきことあれ
此物語よハ古人の注釈あとも彼〳〵ぐいとうのもぐあきものうゝいめ〳〵も
おほぐうよのとあもてちあれ〳〵ものうも思ふべ〳〵れど然ハひ〳〵ざるべ〳〵説よ
いひ〳〵ごく源氏物語あどやうよいまめ〳〵〳〵ネバあるべ〳〵をよきべど
していちんふ此物語ハうとさびうる義よ対居てものうあるよ物のう
彼物語ハひとうあやきうる義人とむつものうあるようぶべ〳〵古今も
うとさび〳〵義とうあやぎし〳〵義人とハきうあおとのうぐあめをふまでもあく
むあやうる義人のうこぐうちうるよさ〳〵うちもあうぐさむるぐあれ人のうろハ

古今のときこゝめあきことふゝいひあれどやくよりこゝさびこゝる義ある詞
物語はすきゆゝしゝあゝわどよく思ひこゝよもるやきゝゝ美人のむつまじ
まとこゝさびゝゝ義のものゝゝとハいづれふゝもどこのやくハ多くる美人と
こゝろこゝらしあんよハこゝんの花よのこゝあやきて今やゝざまゆハやくもひる
べゝれど実地よハ義のものゝゝをやるごとのやくハひるまゝきこゝざあり彼こゝ
さびゝゝことをゆる摽こゝんふハまややぎゝ今やゝぶりをもゝとと思ひこゝる
べゝれバ何ともこゝさびゝ物語ことこゝハ後の物語ハ源氏
ゝゝれゝゝれバこゝれは源氏物語をこゝハゝゝバ又源氏物語をバ義ともいふべゝれど今やゝこゝまは
すぎぬれバものひきまよゝあゝやくゝあゝひふてこゝ物をさゝこゝども多ゝゝされバこゝ源氏物語
をまゝれびゝものとハこゝえゝゝ
彼物語ハ物語ると多くるをや ふゝのゝるこゝふハものゝやくとゝあゝぬゝきこゝともいと
多くこゝもこゝつゝ古様のことを現よこゝるゝごときこゝと多ゝ 縣居翁のおゝ

ひてよ是ハくひゝゝあゝんゝかどいまれゝことのゝゝよこゝふと思ひひをこゝる
こゝもひゝてやくこゝる多くこゝるをふゝるものひゝつゝひゝあゝとすきゝんゝひゝきまゝきゝゝぎ
あゝ又思ふよ源氏物語ハ女のものゝゝふこゝあれゝゝばゝらくのんゝぎゝくよりゝるゝごとの
こゝふハいこゝこゝぬこゝまゝあゝこゝあれゝど公さまのことひゝるハ外様のことよいこゝりてこゝと思ふ
こゝあゝることでもひゝてこゝさハひゝるまゝゝこゝうやゝふこゝのあきふゝゝもひゝくぬを彼物語の
注釈ふこゝよハこゝ所ゝくをこゝきくよとこゝきまゝゝこゝてこゝくこゝどこゝのこゝきまゝゝてこゝふ
人のゝふもこゝれ然りとふまゝゝこゝれゝゝばこゝて詞こゝていふこゝとこゝれ然りこゝと思ふ
ふハ何ゝゝや詞こゝもこゝこゝあゝこゝ詞物語ハ男の志ゝゝゝゝあれゝばおほやゝゝゝまゝ
こゝとゝあゝ外のこゝきゝ国よこゝあゝるゝゝゝゝゝきゝゝ耳よゝゝゝるこゝとゝゝもハこゝとこゝまゝやゝゝゝ
れどこゝこゝのことふハこゝつゝてこゝいこゝこゝきこゝとゝゝ多こゝるをこゝてゝふゝゝ

然ハ女男(オミナキミタチ)の為るざまも男(オトコ)きことのいひてうちそよさ〳〵いるまぎきことく
思ひおとさるることのあきふ〳〵もいひ〳〵更(ズ)らのあれたる女のいぶぐ〳〵のをとこ〳〵きさまを
さきふ山のうつほようれすることあひるるよもぎ〳〵きぐぐものを友と〳〵みひ〳〵ことのいるも
女のうへよいるべきことうハ又女君(キミ)もちのち〳〵か〳〵ぬ男君(キミ)らよさぐ〳〵ひのふさまもかく
うちうとらひのふるどハ上代の女のさまあ〳〵更むす〳〵ごとのこつど〳〵
ものぐるふこるれバとてそ代のぐりよぶることを〳〵ものきよいる〳〵更さて物語(モノガタリ)ふこハ
中古(カナカシ)のこころよりの女のむネとこるものとき〳〵あ〳〵ひるるあ〳〵ろバ此物語ハうち
うちのをとようとぐるれバ女のこるべきよやくきをてすきめ〳〵れとも云(イフ)べ〳〵
もと物語ふこを女のこるべきものときるとハもて〳〵きものこんもてるあと
思ふまこ更心(ズコロ)よりうくハいひそあ〳〵ある〳〵物語ふこハ女も男もみを
あどむる料(シナ)よこるものと〳〵もやざるよりて也(ナリ)ろをあどむる料ることハ
故(カレ)源氏物語をうちのとて〳〵此物語をあるとて古のこやびうあ〳〵

さまをもこ考る〳〵うここよこぶひゃいるとハ古今(イニシヘイマ)とぐものうりやくぐ
わるれバ稀〳〵思ひきこめてこづ〳〵の作文(フミガキ)のこよりかもすべ〳〵源氏物語のうちは
物語ふこハ女のるるうずるさまよいつる作者ふ〳〵をとめ
いつるるりこのをハ帥の宮小梯よこれ〳〵るよいるる更
物語ふこよハ宮種(ヨクサ)のをるるいりあ先をうまく新(サト)〳〵ざれバよこうべ〳〵ごと〳〵
一(ヒトツ)ハ冊子地(サウシヂ)ハ人〳〵こるるる詞(コトバ)三(ミツ)ハうきこうハ考るふこの詞(コトバ)ハ春(ハル)秋(アキ)の
うつりやくさま昼(ヒル)夜(ヨル)の〳〵ぢめを物よこ〳〵べどして中(キコ)あるを云(イヘ)り此(コノヨ)世(ヨ)きのをとハ
何(ナニ)の物語ふこハもいるるとあれバいとよくんをとぐむ〳〵今(イマ)〳〵もをぐるあこ
つるりぜん(イデ)ハもこのをのるべきよいる〳〵ネバむネと新(シ)るべきをとるりさて
ものぐるふこのあ〳〵ひよてその人〳〵の齡(ヨハヒ)の源どよりより又(マタ)こ〳〵ざまの此源(ミコトバ)いや
しきもの儒者法師(ズサハウシ)かどそれ〳〵よ源もころむ〳〵もそれる所(シナ)〳〵の

ひるハふるめきゝとものやびるとそ業よれるとのゝぶしめまてこのゝぢめを
いとよくゝもゝくゞきゝと也ゝ例を云バ此物語にある弦仕大将ゝうもとのゝこ
太宰帥 滋野のますゞ又 右女房達 おどの御ゝ 詠どもハひるゞおうふも
いとふるめきゝ人すれバゝをゝうもちひも考るゞもあるゝと思ふゞゝ
あゝゝゞの大将すゞゝの中納言さネゞの中納言ちゝずゝのおゝ 女一宮
女二宮 藤壺女御又ハ若君達 若女房おどのゝ御ゝも考るゞも詠づゝし
も今めきゝことゝ思ふゞゝゝるとハおどろゝしふゞきふゝよハひゝネど初
まゞびゝ子どもの人をえさきんとてぞうゝ このものゝゝあよ今めきゝ人とゝゞ出ゝ人く
人くの人ゞく考るゞまゝゝゝゝゝバ又此物語の今めきゝ の考るゞ人ゞ御ども を源氏物語あるゝちゝやびる
人とゝえゝもふる人とありぬゞゝゝれまよてゝもさまを思ゝ
物語あゝゝんをあどめ世ゝるゞゞき料よゝるものゝるよゝを云バ貴きも強き

もゝづゝゝのんのまゝあゝと思ふとハ一年のうちよゝてゞびそゞびゝあゝゞゞきゝ
とあゝこの外ハゝづゝゝんをまゞそゝ人のとよゝきゝゞふゝあゝひゝあるとうゝ世
の人の上ゝあるよゝをゝづゝゝのんのまゝあゝ変ゝそもゝゝゝゝうゝれバ人乃
そゝゝゝをゝれるのゝゝハ世よゝるもゝまゞゝぬゞきゝづゝゝのんよゝゝぬゝとゝも
さゝゞゞゝく諾ふさまつゝれるハこの世ゝれゝ人ゝゞゞハ誰ゝハひゝゝんもと世ゝるゞ
といふゝとハ多くの人ゝよ別ゝくゝとゝれゝきゝうゝゝきゝゞどのゝことゞもを多く考よ
うゝゝそのんハいゞゝるものゝるよゝうまれゝゞゝふゝさゝるゝと初めゝゝる人も
ひゝるゞきゝあゝゝネど年をつゝてハ初ゝゝることゝゞゝゝそれハ自然のゝとふゝゝひれバ
考人のうゝよハえゞゝきゝゝと也ゝれバ世よゝひゝとひゝるゝれゝきゝゝとをもゝうゝし
きゝゝとをもゝゝゝゝゝきゝゝとをもゝをゝゝきゝゝとをもゝをゝさまをゝさゝくゝふ

よそくつくり出て物語ふみとあ〳〵ぬるもの也こゝろ〳〵きことはいつゝあ
てハ物語ふみかもくるさまのことをいうゝとそのゝをゝこゝろ〳〵き
かも物語ふみのう〳〵あるうしろきことのさまをもつもまきゝ〳〵みど思し
ゝぐぬれバおのづゝゝんものどゝくぐいるゝきをどゝくぐきことをもゝゝ
〳〵きことも物語ふみかて同るれ〳〵ことあ〳〵んよハ物語ふみよさ〳〵ゝゝ〳〵
ことあれバ何ぞもといゝゝゝゝうひとゝんことゝ思ひすてぬるがやゝて
んをあゝむるよて見をし〳〵も世あれ〳〵人といふ〳〵〳〵 貞雄係氏物語を接と
それは物語をつくり出〳〵ゝを〳〵を論るる事は彼物語のもちよゝえ〳〵物語ふみを
ゝゝゝふゝゝのゝをあゝむるさまのことを引いでものとるゝ委は考るし〳〵れバ
ゝよいゝゝ文さて此の世あるゝといふことを所ハ男女のあゝ〳〵ひのゝとくいれゝれど然は
ハいゝ〳〵ぎゝる〳〵〳〵ゝで世のことゝもを多くゝゝくすをいつゝ作云の人あるゝといふ
ことあるゝゝゝゝ

物語ふゝハ世あるゝ〳〵き料のことあゝ〳〵ゝゝもゝゝゝ〳〵ひもんゝ〳〵も古今いゝくく
ゝゝゝゝゝれバ物語ふゝ出来〳〵ゝハさるやくハいのゝゝも今ハふゝゝゝるゝと
あゝ何のやくハいるゝきゝと物ふゝゝれゝゝまハ編きゝゝる云ゝゝれゝ古今ゝと
むゝゝゝハゝゝれゝ人のゝゝゝゝ〳〵ゝゝれゝゝゝといるゝきゝゝ〳〵ネバ古人のゝゝ
ゝゝ〳〵ゝゝゝを今人のいゝゝゝれゝゝハゝふゝきゝ今人のゝゝ〳〵ゝゝふゝゝを
〳〵も古人ゝゝゝゝれゝゝハいふまゝきゝゝゝれバゝんむ〳〵をゝゝゝゝん
ゝやくゝゝハいふまゝきゝゝゝゝ詞ゝゝゝゝゝ

れば漢籍よんをらでとく見ひあさば知れぬべきをらづまもひ拾る
べよ知れぬべう光は物語ふみつつ見るも讀うぐぬるふもうるとは
ひとすべきとあり又ひとつのふもちひひ物語ふみはもてろをあごむる
料よきものあればつゐへでし世の人くのようれしとふともうあとふを
もまうまうきことをもをうとふともびよ甚あると諾ふべくもあるあれば
物語ふをよひうとひるよきひきことびもよんとめてうあうとはは人は悪き
ことうとひううとは古人の若きことて愛うあかどやしまうこうは古人のうろ
もちひのさまを知べばやそうづうのんをあごむるるべめぞうのぬべき心の
あごやうあるべ世るれ人ぞう　物語ふををそんをあごむるとはうづうそうづうの
人よ云さあるとよはひうを人くのひぶくよよりてはすとう
でのうぢやどもひれば備よ云べうきうぎあればあり

物語ふをよは男女のあうひのことを多く書るうれば漢籍をむ不と学問は
然ることをべきことあきことよ思ひてうこうぬるうんきう嫌るやうよ云そうぬ
れどひきとういるもの何ぞも男女のとををちあるべき人んをあごむるは
男女のあうひよりあるとのひんやは財宝は分よつべきてべいべと
書るものあうう此のよりては財宝をさうむをつうして意もうるも
古今さうようれるとあうぬは物語ふをようえうをも儒若部つる
人もうづうのんを問てひべとあうぬを智るべう若ればんをあごむる料よ
きう物語ふをれば男女のあうひをむ不とは書れ物語ふをようえう
とをればとて君上の妻をひ背り友ある人の妻ようをうとき書るさべひ
のとはあづうまれぶべきうはもと意は切あるよ思ひまうるあうひるれば

うちの人のひれと思ふべくまんとてきるまゞ〳〵きことをもつゝみ出て
云ことあれ此物語よりうきくのことをとり出てハひれどさるねほさるきことをバ
ひとゝきをもあるさゞるもて此あたのんもちひのまきり〳〵を思ふべ〳〵源氏
物語ハこれよりも一段めづ〳〵しうんともいもんとて思ひいゝ〳〵ぬらまく
あくらづ不ゝこれがさるまゞ〳〵きことをさ〳〵ふづ不出てゝちまゞ〳〵あるべ〳〵
源氏物語小もきまある意をバ意ある人どもよことあるをバ知りあゞ〳〵づゝの
んもんまをぬきまをつゝみ出ていふぞゝ〳〵そのゝ〳〵を云バ源氏のきゝ落雲女院を意
そづひあふきき中ゝづゝもいるまゞきことよ思ひえ〳〵あひあゞ〳〵えんもまをぬきまを
云でゝ〳〵おど作者のんもちひのほどを結考るゞ〳〵又女三宮よ柏木のきゝをそろ
どひあ〳〵しもゝづゝハよ〳〵と思ひあそぬとハを知くよ思ひえ〳〵あふさまをつゝみ出てゆゆる
をとのゝどひよてゞよゝすゞすゞきよひゝ〳〵文ゝるさまのとよんんつゞひゝふるよ曙る
ものとゝるハゝづゝ〳〵のんもちひのゝ〳〵ゝ〳〵そぬよて作者の
とゞるゝ〳〵文いとよくおをも後をもゝゝをゝて思ふきせ
此物語を源氏朝臣の作れるよ〳〵いふゝゝれぬとあゞゝそやくよゝ云傳へ

しゝとあれバ小ゆ源氏物語のゝ海物よきゞゝよあるゝれゝれどむゝ
の物物よハゝるゝゞひのいとゝ多きゝとあれバ諸ふゞきよひゝ〳〵文を由を云バ
義家の中堂よゝそどの中およてあゝゞの大將祖父とゝゝゞの朝臣の文
集よゝあひゝ〳〵中孫よちゝバの大臣の堂〳〵れ〳〵中堂をあひ〳〵をまゝよのの
おとゞゝあふ象よらゞん堂の箱よ袋よれて中つゝよつゝゝてもてまゐれゝ
おとゞ〳〵引出てゝあゝバ貞信公のゝのおびいとゝ〳〵きあり鶯きあひてゝれいまゝこ
世よあきもの也云ゝれハ小野宮大臣の中堂あゝゝとれよりて多のゝとひゝ〳〵云云
ひるよて思ふべ〳〵 業花物語月宴巻よ天暦三年八月十日左政大臣右平公ゝを思ふ中年
七十貞信公と中云云天禄元年正月十八日小野宮どのうせあふ情情
公と中ゝ中中年七十一云云小野宮どのハ貞信公の中を帝君実叔のおとゞの中ととゝるゝゝれバ
小野宮どのと此朝臣ハ時をおゞゞうゝ思ふ人の何ゝもひとゝ〳〵ゞどのあ後ふゝよ中名をゝ
も出しあふべきさて此小野宮どのゝ中堂ハ 此朝臣の作あゝんよハ何ゝもむゞゝう
續古事談二の巻よもゝえてあゝる中堂ハ

ちゝきほどのことをめづ〳〵ぐよ世名をもひろへ〳〵云べきその世のいき
ほひをもゝぬ人の云出〳〵ことあるをやさもれ此物語の作者を誰とも思ひ
こゝろ〳〵ぬもとゝゝもぬこゝろもそれば強て作りもんよハ義系為時朝臣紫式
父
紫のの作りしよりもゆりん源氏物語ハ此物語を拠とも〳〵先代のこゝろも
きゝ〳〵れあれバくハしくる也あほ〳〵ふよ此物語ハ源氏物語よりいとく先
立〳〵よハ作〳〵ざるべ〳〵由ハ源氏物語絵合巻より竹元のおきるよう
つほのと〳〵ろぐをひそせ伊勢物語より西三位をひもすとゝえ〳〵ハ古
物語より彩物語をひそき〳〵越るれバ也そをいうよと云より竹元物語のハ絵も
筆者も此物語よりちきひとを云〳〵もて初るべ〳〵源氏物語ハ此物語小
拠てつくり出〳〵と云をうきゝゝるこゝ思ふべ〳〵れど然あ〳〵文此物語より〳〵

さまを彼物語ようつ〳〵あ〳〵れとこれとにたゞく作るハひとりのうへあることをも
二人のとゝ〳〵二人三人のことをひとりのことゝも作るハ男を女より〳〵おどき〳〵
とよてとハひとつあ〳〵さまのえれるべようちをよハそのことのいとゝるく
こゝろの初〳〵れぬぞんもちひのまきれるよれるとあ〳〵も源氏物語ハ今めか
しく えんあるふとむゞもあれバまよまぎらハされてふよつゞをすぐすっと
多きも強もて〳〵きるゆえあるべ〳〵 源氏物語ハもとこの物語よりつゞてうるもの
形く多るハ此物語と源氏物語をうまくミハしてゝ〳〵さるべ〳〵 さて此物語よ
ことのよハ源氏物語むゝ様よ妻よ者〳〵れバこよハひ出文
よりて源氏物語をつくり出〳〵と云 定ども二三うゞく出て云バ
云定よりあよ〳〵れとことあゞきれいく〳〵あえのふともあくおぼ〳〵やす
ふよよりあひて此九帳のうゝびらをひとゝうちゝゝあるひをきてざと

ひるもの考をくをさ〳〵出るとひきれる蕣をうすきうちは淡夕
つゝいとをくつゝ垂てひるをつゝうゝ〳〵ゆうゞるをきるゞゝく
とくひきつくろふゆゝそまもうふくゝちえよひるれるよひきま
〳〵くてひるぎをさ〳〵うゝ〳〵ゆるゝゝめいとおり〳〵ゞゆのおどろく
〳〵きひるゆゝえハ家ものぞきゆひんこゞむすめとおぼすむゝのの
おぼえよゝくまぞのゆふゆめゆ人さまゝうちゆどいとゝくゝもゞ〳〵
〳〵んとハえ初〳〵ものゆゆい〳〵いとよくすきゆひぬゞきゆまどいさ
んとゝまゝひのきゆふゆゆ云云ゆんいときめきゞきゝれゆひてえ
ゆ〳〵ぬゝすものゝゝゞひらのひまゆゝひれゆゝるよひきまだゝゆ
へゞてゝるゝゝゝゝゝゝゝおゝくおぼえゆきひゝゆのゝちほのゆくを

おゝゝとゝゆふほどもゆくまゞらゝ〳〵てゝゝゝ〳〵つ云云
初秋巻よ上いゞこの門侍のゝゝゞゝらんゞんとおぼすよゆとゆゞゝものひ
らゆよゝもをバもの〳〵いふきまゝとおもほゝ〳〵おゝ〳〵ますよ蕣おゝ〳〵ます
ゆゆ苔ゝゝゆよゝつゆゆれてゝゞひゆゝくゝれゞひゝゆよものハゝえぬゞゆゆと
おぼ〳〵てゝゝちゝ〳〵ゝゝてゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝ

うくしてもてまゐりあひて内侍のゝすけのきやうひやうぶ帳のうしろにひらをうち
うゝあひしてものおどのゝようの内侍のゝすけの御ぢちきよこの芸をさし
よをてつゝゝゐのぐうとふきあへバさるうすものくれなゐほゝゑみてつまれた
れバ殘る和るくゝゐるときよ内侍督ひやうのもざやとうちるふしこゝろ云云て
のさまをうつして芸能ハ考るきゝものゝ所為絵のさまハゝうどうづゝ
芸をつゝゝゐひて内侍督をゝゐふさまゐるを彼物絵よハ源氏のきゝ
芸をつゝゝ垂てゐうゐくとゐ出ゝゐひて云紀々家のんをとゐゐあふ
さまよ云ゐゝゝるハとの由ハひとつゐぐうえんゐるうとよとゐゐゝているゐて
事類さゝうえれるゐうよゝゐるハ作者のんもちひよれるとゐゐさいゝ
所為絵よ芸のゝうよつ内ゐゐゐるうゐをとびふをゝどのゐらんゞてこの

ひうゐかても物ハゝえぬゞくと思ひつゞゐふさまよいひゝハ自然かてさることの
時ゐひうゐかてハひるもの也又此ものゞうゐハ女のんむゝようとゞゐる由ハ源氏
物絵のゞくよれうふ芸のひうゐをさゝ出ゝゐひゝを玉蔓のうゝゝをひうゐ
をひうぎをそさゝうゝゐるハ女のんむゝよていとえんゐもおもほゐれど所為
絵のうちかてハとよらうくゞき女ようゞうる内侍督ゐるよひゐゝ乃
るゞゐやとうちるゝひゐるハひゐまゐよ世ゐれをうるさまよゝえてえんゐるん
むゝのうすくゝゐ礼もと作者のんもちひよれるゐもひるゞゝれど所為絵
ハ女のんむゝよハうとゝとすゞゝ

繪合巻よ考ひほひとつひるえてよすまのまき生きゝるよ中納言の
ゆひさすぎよくうひうゐこゐもんゝてをそのまきハんをよすゞれゝるを

えりおきめくるようるふでぎせのくよ(ジョウズ)ものん(コヽロ)のうぎゆ見しすまし
て志づうようきさめくるふことふぎきうこゝとよゆもぐめ生ゆて
ゆうぐとぐめゆもゆ(ズ)その世(ヨ)よんぐすーうゆ〜とおぼ〜ほどよゆも
おも〜ゆんひゆうさま(ミコヽロ)ゆんよおぼ〜ゆもとぐでもぐ今のゆ世ようゆ
ゆ(トコロ)ゆのさまおぼつうゆきうゆ〜いそのうれゆくきひゆ〜ゆうさうの
ゆ(テ)ゆうむゆをとうろくよゆきまぎてまほのうゆき日記(ニキ)よハひゆ〜ゆ(ズ)
れ(アハレ)ある歌(ウタ)ゆどもまぐれるうぐひゆうゆうれもとゆくおぼさ(ズ)
さまくのゆ絵のうろうこれゆうゆうつゆもれよおもゆろく
よろづうゆおゆ〜ゆづゆそひぐゆうちよゆゆぬ云(シカシカ)云
義家(クラヒラキノマキ)巻(ヒ)よ上ハとゆ〜うゆのゆ〜ゆの集(シウ)をよゆをゆふよゆ〜ゆ〜てゆうゆぬ

いゆひゆうゆもぐめつさ〜ゆよゆ〜ゆちそとのゆひておほとゆぐゆいとゆくまゆぬゆて
よゆまをゆふ文(井)のときぐゆよゆれいゆぐ〜とぐゆさをゆひてゆ〜ゆひゆうきそ
ゆらんずれゆ〜ゆの志きく〜をゆうよゆゆ〜をゆて、おほのさゆ〜よつゆてゆつ
さゆすむうゆめそひとつよハ例(レイ)の女のゆ(テ)ゆうぐゆよひとゆうきひとつ
よハさゆうぐゆゆおゆぐとひとつよハゆうゆゆむゆひとつハゆ〜ゆ(デ)ゆれいの
ゆ(テ)をよゆまさをゆふめぐ〜ゆきとゆぎゆゆ〜云(シカシカ)云いゆまひとつをとて志ゆん
ずれゆうれハとゆ〜うぐゆ志(ミヤコ)よゆのつゆ〜ゆ出(イデ)ゆちゆろゆ〜ゆゆうゆうゆひひ
ぐよゆもぐめて京のむすゆのうくをゆひそゆてゆひてをゆくよ秋(ウタ)ゆうゆこ
れゆおゆもゆろくうゆ〜きとハうれよハゆきれゆうそのゆきゆ〜ゆとゆひうゆて
ゆきく(キコ)めてうれハ内侍(ナイシノカミ)督のうゆるゆきことぐゆもよゆそひゆれゆうゆやとのゆふ

さも侍べ〜あれいを侍べんとてとりあれば帰るまてよとて出らんずるおも
もきろきうあ〜きことうぎあり〜まことよとおうある君は扨んぞのすあ
そのゆて天人うりあひ〜時よこひつめうることでもそのよ〜きるあり
めでぬふとうぎあり〜云云てのさまをうつ〜とりて縁会のことをつうあ
をてえんよ云あを〜ものありされバそて縁会のことをそてすまのうう〜の
君をバひう〜の中宮の内絲よさあ〜ふうをあふよ〜まい〜るも此物語よこうどの
これハ内侍督のうるべきことてのくまひ〜をふぐこうるよひうあや君をも
雑ろハよつき〜ことていひうくさん此物語あるも彼物語あるもともよこうどの
ゆ君ことあぐうおあぐ義ある日記をも〜も彼物語よハえんあるうよりとあ
出ていひ此物語よハ実地あることよをて出き〜おどことのさまをうくんむ〜

をもうくうれバうつを〜ことハ思ひよらぬどことハひとつあるをあて思ふべ〜後
うぐハその女のうよ思ひをよを光君ハ紫のうへのことを思ひあふさまよい〜るも
親子のおううひうぐひとすぐふ〜ひあれバ今ひときぐこのぼれることを
いさんとてめをのうくを〜もの也ぐよ男女のあううひよハうきくさあ
ぐきことといと多くてうちゆき〜義あるうことのふううれバ也是望のことも
今めきしとううさびうるとのうぐちめゆて此物語をうつ〜出〜ともも
いとひうきを何ぞもううぐん
吹上巻よ吹上君の内許よてあううぐの朝臣あるよりの朝臣あどの人く
内ものぐうあ出あふ象よおれ京ようをあふる人の内らんぐんもとあるうこも
あるき女あどハ多うるものよてひめれ君ハいやしうう変んある人のむすあ

どもおどハいと多くて男すくなき和るゝしバおろよりらゞハ〳〵うゝぬものよきゝ
女いと多くつきてゐんぬめするよきゝ女といゝどひとりひるハひゝきふるゝよ
おとゝゝるものゐれバるれもくゝと男ひとりよ女ふるゝゝるゝつきてゐん
ひるといゝバひるゞの君多るる中ゆも出つるきの大將さてハ家内ゞどのくゝを
むすめども多んひゝゞるきんよゐんもの〳〵ゐふと承る家内ゞの女ハゞもゝ
更大將どの君達ハさもの〳〵ゐふゐをとゝ女おど人よゝよゐくまさゝ
ゐゝその中ゆも男ハ七郎よひるゐゐふ侍從女の中よハ九よひるゐゐふ
ゐんいとゝよゐくもの〳〵ゐふゝの女君をバ呂今の天下の人えゆえすゞ
〳〵ゐゝ更れゝれ笑えゐふめしどおもほゝるゝとひれバえひるゐゞと
ゐゐゐゞゝ人〳〵笑えゐふめるゞよいとひゆゝゝゝおゝ〳〵ますゆゝゝちゐ

むゞめて出ぶゐんまゝゝるゝてそいとひゆゝゝれおゝゞまづいとひゆゝゝゐゐふ
父のおとゞのふどゝのゝゝ問きて多くのゝゝゝゝゐひゐふるゝとハいとゐづゝ
ゝゐれゝれゝれゞゐゝふも堅ゝすゞよてひゝそゝ〳〵ゝゝのゐゝよゝそゐゝゞ多くゐ
ゝゞハおゝ〳〵てゝゝ暑のゐるゝゐる松風のゝほきひゞきよのどゝゐる彩〳〵を
ゐゝゞひゝをゐふよハ多ゝゞものゐふゝ山人耳ゐゝてぬハゐゝゐきお將
その中ゆも源宰相のゝゝゝきのひれゆもひゝゞゆ后ゐゝ〳〵をゝゐゝよ
ゝて老の世よものひゝれゐゝれ更侍るを多く思ふゐ〳〵られふゝゝひるゞ
の君ゞよいゝゐるゝちゝゝんよそよ承るゞよひるものをとのゐふ云云又
初秋巻よゐきよゐの大將の出絆よゝ不まきの大將のゐゐりゐひて出物語
ゝゐふ条よ世のゐゝのひゐきお保おゝきものハらゝひる女のゐゝゝひるゞもの

いひくるゝおどするゞ彼女のいろきまゝと思ひまどゝるゞんとぞめてきゝ
くるゝふゝみるぞうらうひるものゝそゝろれむゝさゞのゝうどの内時
承香殿の内侍和ぞうの女をゝぬゝるゝおひやゝくゆぞうゝ人の
内侍よゝそひゝくうまきよゝいまゞ中将よ待ゝ時うの内侍所内宴の
まうゝひよひゝうゝあひてゝうゝ殿よきゞゝひゝふゝよすきゝるゝすのゝら
よゝおむゝますようちゝる所どよさゝゝゞ魂あくゝあてらぞらきうゝんを
もゞえてゝうゝと思ひゝうゝよゝらうゝるをゝようひゝんゞえゝあての
ちゝくゝはきゝめてゞえゝゞゝはすほどよおぼゝゝゞらゞゆゆひゝゝんとゝえゝゝ
ほどの内ふゝ見ゝゝゝそよゝひゝれゝらうひゝゝうまきよゝゝゞ老の世よ
その内ふゝゝうゝゝぞうよゝるものゝくひゝれよゝんおもほえぬつひよう

とくてやゝゝあひゝゝゝものゝゝのゝあひゝゝゝぬとゝどのひゝれゞゝのゝまきゝて
いとゞゝゝく魂のゝくゝんゝゝもゝゝゝゝをひゝゝゝうゝる女の今世よひゝゝじゝゝや
右大将今世の女のふゝくひゝゞゝゝゝき内侍仁寿殿の女御ゝそおもゝます
らゝこの承香殿よさゝゝよおゝゝぬ内侍ゝゝネまゞゞんよひゝること
ゝゝゞゝゝそゝゝゝゝ

うの内ふくハひりやう不まさう許(モト)ようの女御の君(キミ)の内ふくひりゝとゝ申ゑバ
おとゝまさよりの許はゐ〳〵んやハよろづのとむつ〳〵うと思ふときこゑく
つをゝんのとるすまふくひりゝ〳〵右大将三条どの(ジシヤウデム)の中将して仁壽殿
の女御の内ふくとりよりあふ(シカシカ)ひりゝのおとゝハ左衛門佐(ノスケ)の君(キミ)〳〵てむゝしの
承香殿(ミヤスドコロ)の内ふくとりよりあふ云(シカシカ)内〳〵んゝ〳〵ぶるゝさ〳〵よお
とゝまさ〳〵更(ズ)いとひとしくてとゝむおとゝまさ〳〵更(ズ)ひとゝきゝ時(トキ)よりゝの
おとゝ仁壽殿ふくるきく人よりてひりゝ〳〵むゝ〳〵より後世(ノチノヨ)までハいとゝゝるさゝの
内時(ミトキ)の女御ゝ〳〵ぞゝ〳〵ゝれねことよおとゝ〳〵ぬゝるゝどゝ〳〵ゝとゝきゝゝりゝおどゝまさよりゝう
許よおこゝるふくゝれねおぼえゝるすゝのおもほえぬとのふ云(シカシカ)云(シカシカ)此(コノ)ふくゝふくの
とゝをゝう〳〵とゝりてゝきゝくの巻(マキ)ある雨夜(アマヨ)のものゝ〳〵りハゝる〳〵生(イデ)〳〵ことゝゝ〳〵此物(コノモノ)

経(カタリ)ある八(フタ)二ゝさゝこゝきのことゝゝるを彼(カノ)物語ハおぼくの女のゝくを集(ツド)ゝ〳〵も例の
此物語よりハ今(イマ)ゝ〳〵ゝ〳〵まゝるきんむゝ〳〵をゝをつくさんとゝのことゝゝう〳〵彼物語よ
光君(ヒカルキミ)の内(ミヅシ)厨司ゝるふくゝどもを陪中将のゝりゝくゝゝう〳〵ゝりよりあふ云(イヒ)生(イデ)〳〵ハ
彼物語ゝるまさよりの大将ゝ不まきの大将ゝとの内ふくひりゝをゝを思ひよを
〳〵ゝるゝ〳〵ゝ是(コレ)ハ内ふくひりゝをゝを思ひ不とゝゝとゝれど彼(カレ)ハ陪中将の内ふくをゝう
〳〵ゝりゝふさまかとりゝ〳〵女(ヲミナ)のゝゝ〳〵ゝるゝを思ひ不とゝゝもゝのさまをゝう〳〵ことゝ
とふゝ〳〵古物語(フルモノガタリ)のことをとり生(イデ)てゝゝ〳〵の作文(フミガキ)の料(シナ)とゝんかもこのゝゝろ
ゝちひよりゝ〳〵ふゝゝきゝ也(ナリ)ゝるゝとハゝゝ〳〵ゝるゝことをゝど云(イヒ)ゝすゝゝれど源氏物
語をゝゝりゝ〳〵ひてつゝり生(イデ)〳〵ふくどものすゝ〳〵ゝるふつゝぬもゝとゝれのゝゝゝづゝ
てゝゝづゝ〳〵んをゝうゝつゝるゝぬよゝれるゝりゝと師(シ)の云ゝきゝまゝ原ゝ彼物語ハ光君

陪中将たる陪従式部丞人のものどうのこの吹上にて ひかしいはずし
の朝臣おろくでの朝臣あつよりの朝臣ゆきまさの朝臣などのこかてこそ
余の人くハ黙よひかしさまあれバ此物語あるも人とハすべ
玉葛巻ゝえ〻紫の太夫の竪むらびくのくよいひかしをハさる
ゐうめきことあべくも藤原巻ゝえ〻太宰帥おとのますがひてこそ
をよぶひ〻さまをうつくることゆゑ玉葛上のいとよをあくて思ひまどひあ
おとのくますがよりもひとときざゝ太夫の竪をいかゝきさまをつくり出れバ也
うちきくさもいと新と思ふるふれかゝもゝ勢ひるをそ云れバ物のうれ
んもちひのさまをよくくあゝふべきるぎあるゝ
夕霧の大臣ゝ〻ふかておもゝ時大学よりかひしことをと女巻ゝえ〻ハ

祭使巻ゝえ〻るすあさの朝臣のおひしもちよりあり出るさまをつくる
ことあべくこれハべくいきをうれはことろべきて表ゝ出ゝもさまをゝ太夫
院のさまゝこちるどまくあべくこ云る巻も諸ふべ〻
蔭のすゝ巻ゝ余の巻ゝ春秋のうつり田くらべあを云ひくそふとハ初秋巻ゝ
ゝえ〻春宮まさよりの大将ゝ院のひ〻年のくもの若舎のらくひるさま
をゝくて花もゝべのとてあ〻夫ゝ今あきゝゝやひるあるんべ〻をゝ
玉葛上の内侍督ゝあるかひきまハ初秋巻ゝとゝうべべ女を内侍のゝ
あゝれ〻をつくゝる也されど此物語ゝハとをつきくゝう云べゝれど彼
物語ゝハまむ行くゝきをバもべきゝもゝろをゝくゝものとふべゝことをて
うど内侍督の使ゝ右ゝいをあてをものゝあゝのふさまなどハとつゝ文也

光君六条院二条院つかうまつりてむすめどもを集てすまゝ
あふことハ義孝君よりあゝでの大将ハ父うへまさのおとゞのむすめ
ハゝきゝの一条のおとゞよりすきゝれ君あひ〜をハ父おとゞよりゆえあるして三
条のおとゞよりむすめどもあふさまをうつくしうるゆえ光君のハたらをいとゝ
とよりそひれ給ハゝあゝでの大将の思ひやりふかきことをいまゝとて也
梅枝巻より明石の中宮の御料よりとて光君より余のハたゝきゝの御ものハ
ときて筆〜をあふことハ藤壺女御あゝでの大将より仰をてゝ宮の御料ハ御
本もとあさをあふ趣をうつくしくなるゆえ紫ど彼物語ハ御〜〜ハ多本
求さゆあふハいどゝうハ〜あふ由をあゞめるゆえ自然えんあるんゝでもゝ思れば也
明石中宮の条内のさまハひてゝゆの思よゝえ〜義壺女御の宮ゆのことを

うつくしくあゞ〜此物語ゆゝもうれしよハことをきゝて居るゝ〜也
夕霧橋巻より浮舟君小野の尼君の縁よりうれすゝゆゝよりより薫大将の尋ね
〜ことハ菊宴巻より三条上さゝ不〜ゞの中納言より すきゝられあひて老賀の山本
あるひえのつゞの家よりこゝもりおむ〜ますゝよりあゝでの大将さゝ不〜ゞの中納
言とつれてゝゝちのゝゝよりのついでより紅葉をありとゝんとてゆゝりあくゝ家ふ
立入ゆゝふことをまゝびゝ中宮浮舟君より素中将おどのゝゝきゝゝをゝとも
三条上よりすゝずゝの中将ゝ余の人〜のゝゝきゝ〜あふはまゝくおゞうれと
これをゝうハ〜てひゞゝとあ〜ぬを知るゞ〜

若菜上巻より六条院よりて夕霧の大将 柏木のうむの君ゝ余の御
ゝ〜源氏君の御あよりて御鞠ひをゝ〜あふ事よりむの君づきて

花そゝのかしくちるやうやさゝふよぎてゝそのどのあひつ家の
ほかへのゝこをきりめよゝれば例のことよりおさまゝぬるそしどもしてゝあく
こぼれもそゝるゝすのつまくすきうぶをどそるのゝるむゝのぬさ袋やと
おぼの四ほ九帳どもをどゝるゝくひきやりつく人まちくよづきてどゝ
ゆるゝゝネこのいとちひさくおりゝぶるをすこゝ大きゝるネこの
おひつぎて像よゝすのつまりやちゝもゆるよ人くをびえさそぎ
てそゝくとゝどゝうきさまよふゝそしどもきぬのおとゝあひ耳ゝ
まきんちす猫ハまどよく人もゝつぬやや猫いとゝぐくつき
ゝりゝるをものよりゝまつれよゝるをよゞんとひこゝろふほ
どよゝすのそばいとゝくもよりゝゞれゝるをとゝよりゝほす人も

あゝこの柱のもとよりゝつる人くもんゝゝゝゝゝゝゝものおちゝゝる
ゝるもひどもゝりル帳のきそすゝゝゝゝゝるほどゝうちきすゞゝか
てゝをゝる人ゝりもゝゝりゝのゝのまの糸のそばゝれバまぎれ所も
ゝくゝゝもよゝゝれゝる紅梅やゝゝんゝきうすきすきくゝか
ゝりまゝゝきゝりゝる々ゞやもゝやゝゝゝゝのつまのやゝゝえて橘の
ゝりものゝほをゝゞゝるゞゝゝゝのすをまゞゝゝやゝゝゝる八糸を
ゝりゝゝゝゝるゝりよゝゝびきてすをゝやゝゝそゞれゝるゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて七八すむゝりゝゞゝりまりゝゝる此れゞちよゝゝほゝくゝゝやゝゝゝす
ゞゝつゝきゝゝのゝりゝゝるをゝゞゝゝりひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れゞゝやゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

る美者(ハカキム)の花のちるをてゝ〜ゝもひ〳〵ぬ美者(シキ)どもをゝるとて人〳〵ひ〳〵
えをふともえゝ〳〵ぬるゝ〳〵猫(ネコ)のいとくおゝばゝ〳〵ゝ〳〵ゝるおもゝち
とてゝ〳〵ゝるどゝとおいらゝゝゝてもくゝうゝゝの人やとゝをゝえゝゝゝ大将
いとゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝれどもひゝらんもゝゝくゝいとゝゝゝ〳〵ゝゝれバでんを
えきをてゝゝち者ゝゝぶきゝゝゝるよどやをゝ〳〵ゝ(ヒキ)ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝいと
ゝゝぬゝゝち〳〵ゝゝゝど猫のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほそあゞよふくひゐぬのこうちぎをきあひてくゝハ三尺の几帳よくゝぬほどあり
くゝハいとをよのうくるゆうよてほそをもぎよむづれるひゐきのちひさき
さゝゞあひてちゞおとゝおども三尺人をひてひゐれどうゐくよくてすのもとよあゝん
あくををくるゐ風のすをふきひゐぐくるをくるル帳のそむよりうくゝうほの
すきてゝえあつるゆうゞいうほいとをゐやうつくゞよひゐめゞこのものやと
ゝえあゐをゝネんゞあゞてゝをゆりあゐよ大将ひゐやゝとゝおをあゐひゐハ
あれハいとあひんすあやとて丈をくハあよのふひんあるゞうゐき時ハうちをてほの
うゐ人よゝえあつるてそうつくゝ久れ世中よのくあすあゐ人もむゞよゝぬハんちむ
つゝき時ハいゞゆいゞ有久んとゝあるものをひゝゞうよの物思ひ出きぬゞき
よおめりてひゐ夏うつくゝくおほえあゐまゝこそゝえあゐとそひりあひて

ほめのとゝちよゝいとひゐさまゝうあひくくあんひりつるひゝゞきゞゞありちくう
ひゐくぬるゞいとひゐくとのあくハ蝶のゝすのもとゐとび物りつるを脇をきあき
くくのれをとゝむくとさるゞき侍りつるを内らんゞつるあくんとやをハいとこの
おとあゞもいをくありやとて出あひぬ云云この右大臣とひるハうネまゝこのおとゞ
右大臣門督ハくゞずゝの胡臣義人ゞ将ハちずゝの胡臣家といるハあるゞの
胡臣の小方女一家右大将ハあるゞの胡臣家の小方女一家の兄妹
女二家よくくそうゝてれ鞠のまゞれを女二家のすゝあゐおとゞよ 女一家女二家 脇家ゝ家のを
とこ家ゝもちもひとつ丈をのびあるゝをあるゞの大将ゝとのゝさまをゝくゝめゝ
おとゞよすゝあるゝ
右のあひて然のあひゝ也ゝのつくくゞまゐてハちずゝのゞ将ゝをくりあく
をのびよあるゝさまよゆもゐハゞれど然ゝ夏見よりおよ女二家のれめのと

をうゝしいおきあひ〳〵ことのひま〳〵あるゞ〳〵そのことをゝもひくさとゝゑんと
てこの糸のつぎきようくて二のゝやひめ宮ハこのおとゞのふ〳〵のゝこゝおもゝ〳〵ますす
淳一ノ宮ハ二のゝやのためのとゝゞ〳〵おもゝ〳〵まをど女御の君のゆえおきく
ぬれバ二宮の御弁よ夜も昼もおもゝ〳〵ます義人が将いゝぞゝおぼをど男
宮おもゝ〳〵まいていきゝゝ〳〵きひることゆゆる人もゝ〳〵この二宮よ思ひゝゝゞ
ゝる君をハゞゝもよつきてものをとゝゝをつぬすまをきれとのゝふもひゝ分
義人が将ハ中納言の君とて内弟よつきつゝゝまつる人よゝゝゝづのさゝゝも
のをとゝゝをゝひつぬすゝよいれよとのゝゞどさるゞきをゝもゝ〳〵いゝゝんしまふ
いゝんとうゞびゝふ云云ひるゝて智るゞ〳〵この深四宮ハ仁壽殿の女御の
ゝゝゝのゝこゝふて女一宮女二宮姫宮おどひとつゝゝのゝこゝれバ女御の

君よりゝるゝをを少えおゝ〳〵ゝゝるゝゞ〳〵さてこの川出〳〵ふゝつのさまをとゝ
て女三宮柏木のゝむの君とのことハゝゝゝるゝゝこのゝ経ゝるゝことハんまゝゝゝ
ゝふてゞよさゝるゝをもひゝ〳〵ゝゝめとゝふむゝゝゝゝれ独きゝゝる君ゞ〳〵
空蝉君よ伊豫介がゝゝ川の家ふて空蝉の君彩猪荻の君と内碁ひをた
すを源氏君ひまゝ〳〵ゝふさまハ國讓君ゝる女一宮とひて宮の内碁
ひをたゝ〳〵をさネゞの中納言内ゝ〳〵のひるゝゝゝまひ〳〵さまゝゝゝ
ゝふゝとをゝつき〳〵もの也

椎本君よ宇治のゝゝやふて蕨大将大君中君をゝいまゝゝふ糸よ
胡すゞゝのほどよ出ゝひゝれどひゝやふくよさ〳〵ゝるひゝゞまゞゝく
て宮のおもゝ〳〵西のひさ〳〵ゝとのゝる人ゝ〳〵出ておもすゝゝゝのもや

の仏(ホトケ)の内(マヘ)あるは素(ロガー)ぐもちものしゝあしらるを色々らんじて素(ロガー)内方は
るゝものあふ内々そびの志のびゝれどおのづゝうちそゝろぎあほど
ちゝく空えゝれバあほひゝゝじゝよゝるゝようふさゝゝじのむゝしの
ゝようゝゝぐ不志ゝる和よひゝのすゝゝひきゝるをゝるおきあゝの
ゝれバとゝよゝゝる屏風(ビヤウブ)をゝ引(ヒキ)やゝてゝをゝふゝてゝとゝる帳(キチヤウ)をゝく
ゝゝるひゝおにをゝゝと思ひてゝゝ引ゝるゝゝもゝ風(カゼ)のすゝれをいゝゝ
吹(フキ)ひゝぐゝゝめれバひゝゝハゐもゝそひれそのれ帳(ミ)ゝ出(イデ)てゝとひふゝ
ひゝるゝおこゞまゝきものゝれゝゝてゝをゝゝゝゝきもゝゝきもル帳をゝゝ
まのすゝおゝゝよゝてこのゝゝゝゝよゝむゝひてひきゝるゝゝゝよりひゝるゝゝほ
らんとゝゝゝゝ先(マヅ)ひとゝゝゝゝ出てル帳ゝゝゝゝのゝきて離れゝもゝ人ゝの

ゝゝゝゝゝきちゝひすゝゝひゝるゝをゝゝゝゝゝゝゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝのひゝゝよ
ゝハゝゝゝゝのゝゝゝまのゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひてよあまめうしさるまゐりひるこよ屏風もきてこと、侍りつい
そぎて〜ものぐきあまでとりきく〜何ころもをくいつひり
いと〜ぐ〜もひるぐさきるぐさうおとそうしろめこぐよぬぐりひり
あふほどそこうこうろふくきそもひそひてこゆろきひる
をひとうこそ不おすぐやうある色ひひをきこくれどこれも
あつ〜うあまめきて紀ぐよこうろぐる〜おぼゆこさ
むこうあるほどよおちこる有る〜〜未すこ〜ほそて
をありとう云めるひすいぐもて いとおう〜ぐよ糸をよりう
ここる やうりり紫の盛のようきこる 経をうこまよ拾あつる
をつきうれよりもほうるこまきあてやきくあるぐ〜ここりつる

君をさうじぐちよ居て何ごとようひうんこあるこをこきて
るこひこるいとひひぎやうつきこり云云
国猿楽よりくて 暁よりこうこ〜もおろさ変二変の出方よりあることいと
うき出屏風をこり出もする所いとちうこれば出屏風やてへぐてこるうり
ゆゆ大将このより家建こ出〜でいうぐうと思ひて一変いとよくおほとの
こりうこれば ふこをふこてこて出屏風のうこよりのぐこれば ひうぬとおぼえ
てをとこ家こちハおほとのこあうこり二変ハ出九帳のうこぐちハうちうぐて
まのぐおろさ変おきあひていこうあることきんとおぼ〜ていあるをいとよくを
出りあふ白きひやひとうこ不出りて出〜ぐおどおほとのこりふくぐあうれど
いとゆこうこうつ〜ぐりとこある服装もおきひうぐりるをこれいまぐちひ

さくらとありふてゆてありよくもうゑゆつあるゑゑもうゐおてゑてゐぬゆひ
ぬ云云ゆるをうつゝゑてえんゐるゑゑとゆゐゐゝていれゐごとのゑゐゝさまゐれど
金くゑゑをうつきゝよゐゑゐゐゐゐゝおゐもいつゐゝゐくゆゐ物語ハをとゑゐゐゝ
ゑるものゐれゐゑまゐゐるゑゑのゆをゑゑゐゝゆゐるゑゑとそいと多ゐるゐの
物語ハ女のゐるゐゐゝゆれゐいとものくゑまゐくよゑ見ゐゑゐゑのことゐむひ
ねて見ゆゑゐとゆをゐもゐんもちひのまされゐるゆをゆゐゝゐ
葵巻ゐゑゑゑゝ六条のゑゐやすゐと葵上のゐ車ゆゐゑひのとハ国譲巻
ゐゑゑゑゑゐゐゐ不まゐの大臣の小方一条宮とゆて宮の東河の辺よてゐ車ゆ
らをひのことゆゐゝをうつきゝまてゐのゐ物語ハ葵上のゐひゐのゐくゝ
ささまを云んゐてことをゐをゝゝものゐ

若菜下巻ハ朱雀院の四十のゐ賀ゐゐ若菜巻ゝを
源氏の大后宮の六十のゐ賀を正月廿七日ゐ出ゐるをとゐ不ゐ若菜まゐゝさゐふ
ことをうつきゝ也このゐ賀ハ菊宴巻ゆもゐ不ゐゐくゝきさまハ此ゐ巻
をゐゐハゝて勢ゐゐゝ源氏君さゐの院つゐゝゝゝとハゐ不ゐまゐの大臣ゐつゝ
の家ゐゐゐの大将ゐ極の家つゐゝゝれをうつゝ出ゐゐる也源氏君ゐ云くゆゐ
きゝゝとき言ゐ業人ゐゐゝゝ結をゆゐゝゐることハとゝゐゐゐゐゐゐゐゝ時ゐ業
人とゐゐつゐゐハゝゝゐゝをうつきゐゐゐ石作寺ゆをゐゐの大将源宇相と
ゐ不まゐの大臣ゐゐゐ又二帝君ゐゆゐゐくゐをゝゐゐゐゐゐゐゐ物語のゐのとの
ゐ右近ゐをつきゆをゐゐゐゐゐゝゝをゐゐゐゐゐゐゐ

ホもほのめ〳〵ことあゞ〳〵此物語よゝえ〳〵人〳〵のんぞくひるゝ者るゞどもをれと
これとゝ〳〵おど〳〵て源氏物語する人〳〵のんぞく者るゞどもをそこと也そ者るゞまもと
拾ひ出てひゞきとあれどさのゝハちちゞあるもとんさ〳〵おきぬまゝことのつゞよ
うぞく出て云〳〵されゞこの物語よゝえ〳〵人〳〵の者るゞんぞくもろ〳〵のことをも
いとよくんよ者るゞおきて源氏物語をゝんよハ己がうるをまゝこでもよく者るゞ〳〵こゝ
者るゞがやうそゝゞ〳〵の作文の料とゝゞ〳〵古書をまゝ引てゝゞ〳〵の作文
の料とゝる人もひれど古物語ゝゝえ〳〵まゝ〳〵ぬきとりて者〳〵ぬるもの〳〵
いち者ろくひゞ〳〵れ出てゝゞ〳〵れこもも何ぞや作意とひゞき此物語よゝえ〳〵
ことをゝゝて源氏物語よ出者〳〵さまをゝゝ者とゝ〳〵てまゝ引てゝんよハひゞゝん
ものゝハゝゝ引出ていゝ〳〵をゝえ〳〵さまハゝゝふゝつの物語を引出ゝゝ〳〵作意とひゞとことのをつゝるゝ〳〵も

ふゝ〳〵れと者〳〵ゝゝゝゝのひをゝゝゝゝつゝることふてゝゝゝゝのゝ〳〵ゝること
よひゞ〳〵ゝゝ此物語よゝえ〳〵大ゝゝのゝゝハゞもゝゝすのもとゝゝびふ懸をゝゝんと
ゝゝまゝのして此ゝゝのゝゝるゝゝすを風の吹ひゞ〳〵も初〳〵ゞゝ〳〵ことを彼物語よゝゝ
ゝゝこのゝゝゝゝ〳〵〳〵のゝゝまゝのふをもおぢさんゞるゝまゝよゝ云ゝゝ者〳〵ゞどんハひゝゝ
ゝゞ〳〵ことを自然のゝまゝよゝ〳〵ゝゝるゞ作意とハひゞきゝゝ物語よまれ何ゝゝよまれ
ゝゝ出てゝゞ〳〵の作文の料よゝゝんハ彼ゝゝるゝよゝゝも一限も二限もんをゝゝゝつふ
ゞゝゝゞゞゝゝゝ作意をまゝ引ぶとすれバ二限三限もんのゝゝゝゝゝゝれバゞゝ〳〵ゝく
ゝゞ〳〵〳〵〳〵

いとれ　やまとの考ハうつほの物語
考とて一巻ありなり　師の玉鉾百首二　撰藻葉巻ハ田中道麻呂の
考をのゝしれるゝ大ごとあれバ諾ひぐゝきこと多くこゝびゝ巻くをよく
考ゝ〳〵ゝ詳ども巻の序を定め故　並と云ことハ源氏物語ハ
ひのてさるやくひることハいゝ〳〵不ど物語ふゝのてゝりハ後よいふゝきことをも
先ゝゝ出て然もゝことの始をバゝぶきていゝゝ不ど又ことゝ巻ハ始をゝゝ物を
きるゝゝゝしふて此物語ハいと多くこのゝゝハも物語ふゝこのむゝゝハさるゝゝ
ゝゝしハゝゝゝゝゝゝゝ初学のものハゝることのゝきゝゝゝひゝゝゝ巻で
ゝれゝゝゝゝゝゝゝれバゝゝゝゝゝゝゝゝゝ物語ハも並の巻くひゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝ伝のゝをてゝゝゝゝゝ更このゝ物語の並の巻のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ことのゝきあるくいつるとおもしまどゝるゝ和くひのきいこゝど俗ときこの詞おハこゝハこれ
ハゐどゝゝの紙を始よおきてことをへゞてゝれバんとゞめてゝゝてもえんよハいとく
ゝるゝるゞし 此俗ときこ紙も作者のゝゞゝゝきゞゝものゝれバ人ゝくの齢のほど
おどいゝるゞゝくとゝゝくゝゝゞゝび年ゝをも巻の序をも定めゝゝ接ときゝも
多ゝゝゝき 今の指本ゐも俗ハひれどゝれハゝも後の人の考ゝゞゝれバ俗ときの紙とハ
いとく俗のきまゝハゝゝれバゝくゝきものゝゝ又指本ゝ俗ときの詞の
始よこれハゝハゐどの紙のおち
ゝる和くもひれどくゝゝをゝゞ
巻の序のゝゞれゝとハゝよゐも道麻呂もよく考云れゝれどゝもゐ巻くの
うちのゝゞれゝを後考ゝゝて論ゝられゝゞよ云れゝことのゝゐゝとハゝゝゐ
ゝゝびゝゝもゝもまゞれる並の巻をいもれゝもまゝ然ゝゝゝを云バ道麻
呂ハ藤原考ゝゝの二巻のゝを並ゝゝ猿苗代系 此人の考ハゝよゝの梅花巻系

使菊宴の三巻を並ゝゝれゝゝもゝゐゝゝゝの巻くゝゐゞゝゝゝ序ゝれゝ
ゝきまゝゞびゝゝれバゝゝのゝゝゝ更ゐ海抄よ此指後のゐゝびのゝゝを考ゝゝれ
ゝも古俗のゝきまゐゞゝ紙ゝゞゝれバゝゝゝび巻くゝを序ゝ定めて年ゝを巻
ゝゝれどゐ保ゝ紙ゝもゐゞきゝゐゝきゝゝゝゝ年ゝをゝゝゝゝゝゐバゝゝ
ゝゝ思ゝ潰ゝゝゝゝゝ

君をあるき契よおもてをくしけずえよとあんのあてきしあるずゝやもあり作を
られて源の将監仏たちゝの契りあるゝ君をもさる契りあるとあん
作きゝれしあるゝいとうれしきかどゝゝとのあひて云云源氏院巻よりあるゝの
仏法ハつネよこのよきつ云云源仏法のきゝをちゝゝと契りてゝ
らふと云るも此巻よゝゝよつぎている也源仏法ハあるずゝの朝臣をひりさて
どもハ樓上巻よ　るの巻よゝゝるとゝゝるの族のこと
つぐゝよゝゝ

第二　たゞこゝとの巻　ゝゝゝるの巻並一

此巻ハたゞこの笹梨の花をもむネとき巻るり此巻をもとゝゝるの巻乃
並の一とき巻ゝ由ハ梅花笠巻よたゞこの笹梨の素日ゆてまきよりの大将よりの
あく巻ゝあゝ時ゝるゝの花を云る詞よんゝく仏ゝゝるネんじひまり

てあん十日巻かてあんまりこりゝゝ今年二十年よあん仏ゝゝる云云ゝゝゝ
もて逆よ年紐をゝるゝるよ梅花笠巻ハたゞこの笹梨の三十三巻のときあり
あゝゝの朝臣二十三巻の二月廿日よまきよりの大将素日よ猶であゝ
もてたゞこの十日巻の花をゝるゝふればあゝゝの朝臣三巻のときか
ゝゝりぬれバとゝゝるゝゝよりの年よあり故とゝゝるの巻の並の一とハ
定めゝ乃麻呂ハ此巻をとゝゝるの巻の並の二ときゝゝれるハこの巻の後よたゞ
たゞこの父ちゝの大臣をあゝとをゝ後ネ君巻の姫よちゝの大臣の
ゝゝれハ巻よ思ひをゝて後ネ君巻のつぎよ此巻をわれあゝ後ネ君
巻よちゝの大臣のゝゝのゝゝハまきよりの大将よ女一宮をあもゝ時のむゝを
ゝるかて実地ハひて宮の十二巻のときのとあればちゝの大臣をあひてゝゝ

の年を經ゝとぞうゝくこうゝむゝをうゝより出ることあり經ふをよいと多き
とあり狐を說を云ばとゝうゝの巻より不まきの大臣とゝうゝの女系極のくにみのおう
うゝをれ山のうつほより迎へあふときの詞よむゝちうゝの大臣のゝゝひとゝのみを
まゝむゝよむゝゝれて今ハ昔ゆもゆえ更とひゝ此詞より依ゝんよハ右之巻
をしもとゝうゝの巻より為へあよおくゝゝや既云ゝとく抱經ふをのてゝりかて
後あることをもゆゝりあく云出るゝゝあれば何ぞもゝこふゝき此うつほより
あうゝゝの胡良母みをむゝとあり巻るハあゝゝゝの胡良十三巻のときあれば右之
ひゝゝりの法師よりあひて既よ十年むゝりよりゝれば不まきの大臣の
むゝとのあゝんとつきあゝゝ更又右之巻の姫よゝくてまゝ淺澄の内時よ
とひるもとゝうゝの巻の終ハ朱雀院の内時あれハとゝゝあ代のことを云出る

あれバゝくて又とハいつゝゝる繼ども ひれバゝゝび並の一とハ定め

第三 義系若巻 とゝうゝの巻並二

此巻ハ多くの年を云るさまあれど既云ゝとくむゝをゝるかてひて家ハ年
十二と変えゝる二月より出家なるほどもあくおとあよりあり出あハ云云ゝえゝし年より
次年の七月までのことをいつゝとゝうゝの巻よゝえゝるゝ不まきの大臣の八月より
相撲のゝゝひるゝじ右あふ年の若年の七月までのことをいつる也ゝくさゝめ
されバ此巻よゝえゝしまきよりの大將の内る達の齡の程どく因幡殿多巻より
おあゝじ右ゝゝの齡のゝゝりあしゝことを云ゝよひむ不バ也此巻の二月ひてゝゝ出家
の年とゝえゝしハあゝゝの胡良廿一巻の年のことゝあり右之巻より八十七年を
うゝも經ゝ後のとゝれバ並の二とハ定めゝ

第四 嵯峨院巻（サガノーノマキ）　今年のこの巻と考へは出雲の下巻也道麻呂も考へ

此巻（コノマキ）はとゝ〻の巻のつゞきなる由（ヨシ）は既（スデニ）云るごとし　さてとゝ〻の巻よりえ〻

ゝ不まきの大臣（オトヽ）の相撲（スマヒ）のゝ事ありてゝ　年（トシ）の八月むつのよ　次年（ツグルトシ）の二

月の比（コロ）までをゝるゝて相撲のゝ事ありてゝ　年の春（ハルカ）のことをばとゝ

ゝ巻の巻ゝも此巻ゝも云ざるは　並（ナラビ）の巻〻よ云（イヘ）れば　なるべし

第五 梅花笠巻（ウメノハナカサノマキ）　嵯峨院巻並一

此巻はゝ不まきのおとゞ相撲のゝ事ありてゝ　去年と同年（オナジトシ）ゝてさゞの院の巻は

八月むつのよ云出（イヒイデ）てゝ巻（コ）よは二月よ云始（イヒハジメ）れば　さゞの院の巻よりあと（マヘ）あよ重（オク）

ごくもゝべれど　然（シカ）あ〻ず（ズ）とは既云るごとくさゞの院の巻はとゝ〻の巻の終（ヨスヱリ）

よりごくべきをひく　知（サト）〻ざんとて巻の始より不まきの大臣のゝ事ありてゝじの

ことをほのめ〻（イヒ）出れさる〻〻此巻をばあ〻びの一とはき〻也（ナリ）とく定（サダ）められば

此巻と吹上巻（フキアゲノマキ）とよつゞきてことゞもの多くてよゝうべ〻〻と〻（ナホ）物つゞきよ云（イヘ）る

もゝて知（サト）るべ〻

第六 吹上巻（フキアゲノマキ）　嵯峨院巻並二　今年はとゝ〻ひゝ今年の下を上とし今年の上を下とまゞ〻巻麻呂も然いつゝ

此巻もゝ不まきの大臣の相撲のゝ事ありてゝ　去年と同年ゝて梅花笠巻（ウメノハナカサノマキ）の

終（ヨスヱリ）よつゞく也（ナリ）　梅花笠巻の終よは三月の比（コロ）ゝ事ありてゝ　巻（コ）よは二月廿九日あゝ

〻の朔日（ツイタチ）の人〻（ヒト）吹上のそまよ出（イデタチ）ゝことを云（イヘ）るもてゝつゞけとも名めべ

ゝれど去〻〻更（ズ）梅花笠巻はひてゝやの巻〻よゝれることを云（イヒ）つゞけ〻〻あれば

そのことをのゝいひて巻をとゞめさて巻（コ）よは三（ミチ）〻すゞ〻〻の朔日の生（オヒタチ）ゝ

さもよりの神南備（カミナビ）のゝ不まつゞよあくゝづることをおどをいひすゞ〻〻の朔日（ツイタチ）

ざえのめぐさくうしときさまあどほのめうしいて糸ある人くちもれは愛
てぐあるまつるよしをつる出しゆてぐるようきぐれがうやと人の彼如よりて
あふよしのおれば也此巻は二月よりのことをいふふたうきし越されどこれも
初後ふたのてぐあるありて糸の巻よハ二年まで後のことを云つぐ〻あぐし初秋
巻ようたちて云ふ糸の二月中の十日始の庚申ひのし年の六月むうあ
よりて云るあどやうのことひるまてうしぐふまぐきも此巻と梅花笠巻ひとつ年
ありと云ハ此巻は一日春日かてうよあくぐるひよりるあぐりあほらしうはれば
あんとやきまきの朝臣が云るハ梅花笠巻よりえし春日祢のときのことを云つも
この春日祢ハ二月廿日かて廿三日は糸よりあつ則あうぐの朝臣巻の人くハ
同き廿九日は又吹上のもまは出たちめひしやいとほどちきこと也又吹上の

家よてすぐしの朝臣あうぐの朝臣巻の人くむつものぐあしあふ糸は此
春日かてひそもしくこうの彩よりそあうぐ多くあうぐおとしてしとひるも
春日祢のときひて糸の琴隆あひしことをうあ出るるあるあうぐの朝臣
の愛あひしさまハ梅花笠巻よりえしもてひとつ年あるを智るぐしさて
此巻のとハ二月より廿月の始まぐを巻るしい巻ハ八月より十月の始まぐ
を巻るきあ廿月より七月まぐのことをバちぐきぬそのもぶるをバ祭使巻よ巻る
きし此巻くの浪ハいと事繁くて巻彼いうぐしれるうくく巻くよことを
ぶてよくきやすくきしを後は巻の序をぐあて智りうきうくハありしぐ
いとあびんあれ狩祭使巻よもとぶあて云べれど年立の昌をうて巻大肯をバ
知るべし此个巻も同年の八月よりて祭使巻の終よつぐきものあるをひと

巻ときそ〳〵はす〴〵の胡蝶の舞ふくをむかしとあるさ〳〵巻あればひとつ〳〵とはそ〳〵あるべし〳〵此巻を梅花笠巻と同年あると云る説はさうの院吹上のもまよは巻の時ひのうちうきを社ゆてたゑひのぎ讀經〳〵あふあをもをなてゐおのてゆらんべあふ象よりうどおこあひ人をほの〳〵ゆらんぎ〳〵やうよおぼさる大將きよのおろそおどハ春日ゆてこあひ〳〵うばそれと思ど恥畏わ〳〵をおぼして只今もいこ〳〵うあひつるをこれば初〳〵ぬやうゆてさめ〳〵ひあふこどむ〳〵よりゆらんべこる人をおぼ〳〵ゆるよたゑをおぼ〳〵出てそれるあるとおぼ〳〵さべめ云云とこえ〳〵よておあ〳〵年あるを初るべ〳〵

第七祭使巻 遊嫁院巻並三

此巻ハ既云〳〵ごとくうゑ不まさの大臣相撲のうあひるべ去あひ〳〵年と同年ゆて

吹上巻の上下のるよ垂てこるべきもの也然ハ此巻を吹上巻の中巻ともすべきことあるよこと名をいひこと巻とき〳〵ハいふおどあべ思れど年よあこべ用並よよりて巻〳〵べこるハ史書あどいふむ糸〳〵きふこのうあれ拾遺ふこのちあるよ〳〵ぬことありすべて拾遺ふこのさまハまづいべきことをバきすべよ云べきこと事の云べきをバこ〳〵おあることをもこ由もあく云出るおどやうの云どあるきうちゆもこひとつ年のことあるをバそれとあくほのめ〳〵ぶてそれるあるここる人のうよ巻べ〳〵くまべ初るべ拾遺ふこのてあるこのことハ此拾遺のこゆ〳〵べ今の俗のうあることゆもれもこれもひとつようあてハこべあべ〳〵てゆこるべ〳〵きをバまべうちふべきことをひとすべちよう〳〵おきて今云〳〵ものうあ〳〵ときあべ〳〵のことあり〳〵おどい〳〵ハゆ人もい得やすきをもて思べ〳〵きと吹上巻

（巻の木の葉）吹上巻の胡床七の所々をむかとうるゑれバそよひづ〳〵ぬことをバちぶきて此巻よりつることすゞ〳〵を由ハ此巻ハ紀のくゐの吹上のきこの所辛よりいゝで
と思ひるるを人〳〵さうるゆゑをかれバ云〳〵ハすゞ〳〵の胡床より始て
ひて実の所作よりまゐり〳〵時のことあり吹上の上巻ゆてかうこの胡床
多の人〳〵すゞ〳〵の胡床とむつものゝ時ひてゝやの所〳〵をうるゆゑでおふ
をひり〳〵ゞられまでもうるゆ他を実も志ふゞれどを人〳〵のかうこの
胡床とおをゞう〳〵ぬものゝ〳〵いそぎさいふ所どかいひゞもやをどもひうゝ〳〵
あひ〳〵を家よひう〳〵きさまのあるゝこの胡床多の人〳〵さうるゆゑえさを
れバとひふことあるをゆ此巻ハ二和三和まゞすゞ〳〵の所名を云で紀のくゐ吹上
巻とのゝ云〳〵も吹上の上巻よつゞゞ他ゞ〳〵ゆや吹上の下巻かてこの院

吹上乃もまゐ所〳〵あひ〳〵時ゝ度上をゆるれ源氏をゆひ所名をすゞ〳〵
とゆひられど此巻ハまゐりおのことあれバこゝで吹上巻とそひゞれ又吹上の下
巻を此巻のつぎとを〳〵由ハ吹上の所業のときすゆふさう〳〵ときものとゆ〳〵
ゆ〳〵て吹上の所業の所他ゆさゆ〳〵ふゞきゆ〳〵仰をゆふと吹上の下巻よりえ〳〵ハ
此巻ゆまゐさゆゆの大将の家ゆてすゆふさのさえのほどを始てひう〳〵ゆえを
れバこのゆ〳〵まゐさゆゆの大将ゆものゝ序ゆ奏されゝことのひり〳〵あゞ〳〵然
あゝゞ〳〵んゆハすゆふさう〳〵ときものとゆゑ〳〵とゆゞ〳〵ゆハ吹上の下巻を此巻ゆ
ゆゑもおのことをバまゐさゆゆの大将の家ゆてすゆふさのさえのほどをひうえを〳〵を
まゐさゆゆの大将を外の人〳〵愛ゆふいと遅きことゝいふゞ〳〵吹上の下巻ゆて
内のうちど神泉の紅葉賀〳〵あふとをきすゆふさゆ試の影ゆひりてを去ゆ

さるもことの始終をとくのひそしらるることあるもの

第八菊宴巻　嵯峨院巻並日

此巻いうかゝまきのおとゞ相撲のこゝろひろゝ志あひ〜幸と同年なる吹上巻の
終よりでくる也吹上巻八十月の始むろゝの宴どもをとゝらめ是よハ十一月
朔日より嘉宴の殘菊宴〜あゝいつゝ吹上巻よりでくゞき由ハ此神泉の
行幸よりつゞきのおほいすきすゞ〜おゝゞすゝるゝでんとゞめて琴つゝゝまつゝ〜
よゝゝゝでの朝臣よ一の内親王すゞ〜の朝臣よまゝさゝよゝゝ九よひゝる女あゝゞき
ゝ幸〜ゝゞゝゝゝゝとゝん侍る云云まゝさゝよゝの大將嘉宴よりゝゝあゝこと
此巻よゝゝ〜ゝて初るゞ〜神泉の内裏のことハ吹上の下巻よゝるゝそゝこゝよ
すゞ〜の朝臣よまゝさゝよゝの大將の女ひそ宴あゝゝでの朝臣よ皇女をゝゝすゝ

ゝこともひゝ〜物云バさゝの院の巻よ年ゝゝて云云すゝゝゝ大内記嘉宴學
士よゝゝゝゝ

うつまつゝぬおどろくつうつまつるゆゑしうそのをりつうつまつゝ更ゆゑふし
云云おうよりの朝臣がいつるハ吹上のもみまの山雪の時のことをふるれバそゝ
年あるハひつきことも

第九ひて宴巻　嵯峨院巻結ス

此巻ハさゞの大后宴の六十の山賀ひかゝ年と同年の十月より次年を云ひ
まゝこゝ次年の三月のころよりてゆめそハ三年のことを云ひて嵯峨院巻の終
菊宴巻の終等よつゞゆ又二月おうの十日より始の庚申出きゝる年ハ初
秋巻より二のゝゆ生れゆふ年ハ田鶴鳴音巻の年の表ことを
云へるゆうくゆくすゑのことをもうこれるハ既云りゝごとく物語ゆゑの
てゞゆよてひて宴のときめきゆふ逐をうゝゆ知る也ゆさうえのむかとゝ

をとハ皇おひまゝこいできゆゆゆうう〳〵のことおゝれバうく云でゝそ中巻の
をうゝゝゆゆひて宴玄宴よまゆゆふゞきを定めゆひゝことハ菊宴巻より仁寿
殿女御と中母大宴との山物語小も考るきことふてゝそうゝのうぎりんまどハゝ
ゆふっとおどもそしとハ云初ゝさ示ど考ゝよふゞゝゝるハゆち考ろくゝゆれバ也移
年紀のゝしゝる逐ハ初秋巻田鶴鳴音巻より也云へゝれど年立よゝうハ
ゝてうまく智るゝ

第十初秋巻

此巻ハ嵯峨院巻よつゞきゝる巻ふて既云しごとくひて宴巻の二月おうの十日より
始の庚申いできゝる年と同年の六月より八月までをいつゆひて宴巻ふハ
二月より三月までをのひて四月より九月までをバもゞき又十月よりひて

妻宮の一宮生れぬふことを云ふれバまちぶる月を改元よいるありさて改元を
二月のおうの十日より始の庚申いできる年のことい〳〵る由ハまさよりの大将の
家ようれまきのおとゞおちまして内侍宣えうハ〳〵ぬふ条より右大将くれまきどの
こてよまゆゆこしハむう〳〵ことをづうう〳〵ぬふ〳〵今ハいやすうりるいるしゞの
おとゞ大将まきのうり今ハうう〳〵ろまおすべきくやハ待ん者ハおぼすハと宣えぬふ云云
うくゝれまきのおとゞのぬふて妻宮よりて宮のまるりのひ〳〵後ぬるを思ふべ〳〵うれ
まのきのおとゞもりて宮のゝゝ人のうちぬりぶむ〳〵ことをちづう〳〵ぬるるとの
ぬふ也十年二十年のとほきをも一年二年の程どちきことをもむ〳〵といるハ
古の例よて内侍ふハいと多〳〵狩改元ハ
れバ續うて〳〵ぬるべ〳〵

第十一 田鶴群る巻

此巻ハ初秋巻よつぎて〳〵明年の六月ぢりより八月までをいりりて宮巻の
妻宮の二宮生れぬふ年と同年也初秋巻も改元もとも六月ぢりより
云始て八月までよことをとぢめ〳〵れバひとつ年ぬやとぬふべ〳〵れど者〳〵更うる
例ハ此内侍よいと多〳〵国譲巻 樓上巻ハとも二月ぢりより云坐〳〵りさ
れどうれハそのぬちめ正〳〵れど此巻と初秋巻とハ〳〵ぢりさぢうぬ〳〵ネバよくんで
め更ハ〳〵〳〵ぢめ者りぢうるべ〳〵さハい〳〵此巻よまるきよりの大将の姫君きの巻齢
の程どを云る もて初〳〵るるあり 今年より巻齢を〳〵るるよう〳〵 改元と義京君巻とハ
ぬふる者〳〵りれ〳〵ぬるべ〳〵
六年へぬ〳〵りきぬの院巻とハ四年へぬ〳〵れりぬ〳〵由ハ此巻と彼巻とるまるきよりの大
時の姫君きの巻齢の程どりるハず〳〵の胡蝶あくぬの胡蝶巻るの巻齢ぬどいる

ゆてうぞく、知るべしも齢のほどもバ年立又系譜ゆも考へおきられバそうハしてゆふべし又此巻の始よ内のそうどの西殿よ有ほすゝしゐゝどゞろくハいふぞゆゆどすゝしゞゞ女房のそゞぬしゆるゆちのする大将まさよゆ今この八月だろゆふとゆんゆふゆゝるすゝしの朝臣むろゆハきろゆふゆゝしを書家よりきんしゐゝゆゝしゆよゆまれと仰きゝれをゝるきんしゝゝんゆるとゆゝてゐほまゆゝきよをゆゝハ奏さんと仰きゝれゝゞバゆんまゆゝを侍ゝしをそのうゝゆふとゆゆゆゝるものゝちひさく侍るほどよいまゞでをこゝゆ侍る云云ゆるハ内のそうど祐泉よて紀家賀志ゆふ時すゝしの朝臣ゆゝでの朝臣名琴よゆくつゝまつゆゝる西ろくのこと也書家ゆゝそゝきゆゆゝしハゆゆく義京君巻よゝえゝゆそゝちづゝゝまさよゆの大将よ申えゆゝしハ菊宴巻よゝえゝしこと也これを

ふゞこてまさよゆの大将奏しゆつゆゝちまさよゆの大将大家と西物語よこゝゝのも大家ゆゆゝゝのもおほゆゞのゝゝゆゆこと也よきこほどよゆゆふゝるをとのゆふゆて年のへゞゝゆしを勢るべし

第十二 花宴巻 上中の二巻ハ今年のごとし 今年の下巻ハ源氏院巻ゆる由ハ既ゆいつゆ西殿の下巻とき〻今年ぞこの下の巻ゆれこのことハ左麻呂もいつゆし

此巻ハ国語釋名巻のつぎゆてを次年の十一月の頃ゆよりゆひてまゝこの年を云ひき明年の二月まゞのことをいつゆゆめて三年のこと也そゝ由ハ此巻の下巻よ書家のちゞめの家ハ若家と申西巣ゆの頃ど云云才の家ハ臣と

いつるハ書家の一家二家の西ことゆゆ此いつる西藝もて此巻ハ三年のことゆるをゆふべし此家巻をゝもひて家の生ゆひし家のことゆゝ家とゝゝゝゝふべゆれバ

そのゆゑ由を云べし此家巻の作歌をうぐべし出ざるおよぶちつぼ歌宮いうべきき人ありうしろで今の后よりそハ坊ゲ木をひとりあるゆも ひ〳〵更ふるゆまで玉をうぐきてもとまる云云ひるゆてゆふべし移徙どもの多れどさのこハ更づゝ〳〵れバのもの更

第十三國讓巻 今年の中巻を上巻と〳〵今年の上巻を中巻とす〳〵今年の讓縁院巻ハ此巻の下巻なり今年の下巻とす〳〵ハ義冥巻の下巻なることハ既よいつり〳〵 乃麻呂もこのことハいつり〳〵

此巻の始ハ義冥巻の終の年と同年なり彼巻よハ二月までのことを云てとぢめなるよ此巻よまと二月より云始れバこと年のさまなれど然〳〵更ことハ初秋巻と因幡群多巻とのゆぢめのごと〳〵此巻ハ義冥巻の終の年と同年の二月より云て次年の三月までをひしてゆゑハ二年のことも也さて此巻と樓上巻とのゆるよ二年のことを脱きりそハ大家の作歌のほどを樓上巻よいるよゆゑハざれバ也是をもて此巻の始と義冥巻の終とハ同年よハひ〳〵ゆゑどうこぶもひるゆ乳どまくく然ら更を侍ハ此巻よ去年の冬人なゆをでこおよて作ゆをつゆうまつりのひきとゆゑ〳〵ハゆうでの朝臣内のをどのこおかて外祖父〳〵ゲの朝臣の文集よをゆひ〳〵ことをいつりをゆ類ハ義冥の中巻よをゆゑゆ又ゆうでの朝臣の絹よ去年の冬ゆすよ作ふをつゆうまつり〳〵ろくかゆんとひるハ玉乳ひの器梨よ貞伝公の作石帯をゆを時の絹よて去年の去ちすよ作ふをつゆうまつり〳〵とのゆふも外祖父〳〵ゲの朝臣の文集よをゆひ〳〵をいつり貞伝公の作帯を作ふをつゆうまつりゆひ〳〵ろくよ内のをどよりゆを子をとも義冥の中巻よゆゑの下巻よ年ゆうて乳バ云云ひるハ此巻の始の年と

同年あれバとそうどの内あるかてにあるつくりまつりあひしを去年とハのゆふ
あれ狩を猟を云バ藤壺女御梨壺女御などのもろ〳〵ゆよりを義孝の下
巻よりほのめ〳〵出〳〵うるゆ此巻の始よて出れゆふよても同年あるをもつ

第十四 脱巻

此巻ハ二年のほどひるゞき由ハ年立の象り妻云ゆ

第十五 樓上巻 今年の下巻を上巻と〳〵今年の上巻を下巻とすゞ〳〵ゆ麻呂も然云り〳〵

此巻と國讓巻のるハ二年のほどをゆるゞ〳〵巻の脱〳〵とハ年立の象ハ云
るゞと〳〵ゆ二年のほどゆるる年の事より此巻ハ〳〵ゆ知る也ゆ由ハこの
巻よりゞの朔日の詞ハ大宴をおろそうよおぼ〳〵るるよてゆるゆれ云云
つゞきまりゆきまし〳〵と思ひ侍る来年ハ七ゆ年ゆふとい〳〵るふて思ふ〳〵琴

孫ゆつるゞきまりゞの朔日の京極の家ハ内裏〳〵ゆ内裏〳〵ゆ朱雀院ハ帳の
〳〵ゆ引ひゞくゆ趣ゆどをゆてもゞゆ云ゆつむりゆ云ゆ云ゆるとハ
ゆゆゆめてハ大宴六巻の表の歌ゆより七巻の八月十五日ハ遊覧院朱雀
院の両院后宴〳〵〳〵ゆ大后宴諸后宴侍ゆ侍ゆてゆりゞの朔日の
京極の家ハ内裏〳〵ゆひ〳〵ゆ〳〵の内極のことをつくして後大宴の〳〵ひ
琴きこ〳〵ゆ〳〵愛ゆふことをのひ此内裏の勅賞ゆりゞの朔日の外
祖父〳〵ゆの朔日ハ三位の中納云を贈らることを云て巻をとゞめ〳〵
趣もゞゆをもりとそ云れ

空物語玉琴一の巻 終